

今年も庭のカンナが咲いている、この赤はいつ見てもいい、若い頃からカンナや鶏頭の赤が好きだった、花の話をするとは気恥ずかしい限りだなどという世代なのかもしれない、それとも世代は関係なく、花のことをとやかくいうのがいやだったオレなのかもしれない、花を愛でているとか花が好きだとかそういう事はいわなかった。何を隠そう若い頃からカンナや鶏頭の赤が好きだった、この赤は好きな色だった。ただ今年はちょっとその赤が気に食わない、というのはなんだか黄色っぽい、絵の具でいうなら少し黄色を混ぜた色になっている、本来なら赤色にやや赤黒い臙脂色を足すぐらいであってほしいのだが、赤色に黄色が少し混ぜられていると勝手な事をいっている。勝手な事と言えば、紫陽花もしかり、我が家に来た当座は真っ白だったが2年3年経つとピンクが混じり始め今や薄汚い薄ピンク、それこそ花から「勝手な事を言うな」と怒られそう。

昨夜アトリエでぼおとしていた、絵を描くのも本を読むのも嫌になって、ラジオも消して何も考えずにぼおとしていたら「リーんリーん」と虫の鳴く声がある。耳を欹（そばだ）てたら聞こえた、「え、まさか、虫」と聴き入った。虫の鳴き声など聴くのは、もう何十年ぶりの事か、多分ずっとそれこそ毎年、ずっとそれこそ毎日鳴いていたはず、聞く耳を持たずの日々「ああだ、こうだ」と勝手な事を呟き叫んでいた、ラジオやらCDやらと何かの音が鳴り騒いでいた。窓から顔を出して聴き入ると傍の草叢から聞こえてくる、まさかの嬉しい出来事だ。動画で鳴き声を検索したが解らない。スズムシかマツムシか、コウロギではなさそうだが・・・。

いつものように安威川を走っていた、9月が近づいたある日、「寒い」と夜中に起き布団を出した、それからまたすやすや寝たようだが、朝起きるとまだまだ眠い、いつものようにもう寝ていられない、覚醒するというわけにいかづぐずぐず布団の中に居た。若い頃はこのぐずぐずが長かった、なかなか起きられなかった、ぐずぐずがこうじてまた寝てしまうというのもいつもの事だったが、その懐かしい感触が思い出された、その日から体調がいい。オレのリズムは5月～8月がマイナーでそれ以降はいいのかもしれない、嬉しい季節がやって来る、大歓迎だ。話は飛んだが相変わらず遅い走り方、ほとんどの人に追い抜かれる、あれなら同じぐらいかなと対岸をゆっくり走る人と同じ方向に走るが、やはり彼の方が速い、女の方でポチポチ走りの人にはたまに勝つ。目も悪くなった、元々近眼気味だが、濁りと霞みが加わったのか前のようには見えない。絵はそれこそ半世紀もやっている仕事なので少々見えなくても解決できるが、普段生活には不便を感じる。後でわかったが軽トラックに黒い単車が乗って止められていた。それをずっと見ながら「あれはなんだ、新しい乗り物か、見た事も無い形だ」と思いながら近付いた。河原のある部分だけ風がきつく吹いている処、草がそこだけ靡いている、草の裏と表がひらひらしている、そのひらひらの塊が何かの生き物に見える、あれは何だろうと近づきながら、葉っぱかと納得する。終点に近づいたころ右の川の中州に鷺、若いアオサギが警戒しながらこっちを向いている、おお、と思って見ていると、まずふわりと1メートルほど浮き上がり、踵を返して川上に羽ばたき飛んで行った。声は悪いが、飛び方は優雅だ、あの飛び方だと1キロや2キロぐらいの距離はひとつ跳びなんだろうね。

田邊優貴子著：ペルーとボリビアにまたがるアンデス山脈の中部、標高3800mほどに位置するチチカカ湖に浮かぶ小さな島を訪れ、そこに住むケチュア族の島民の家に泊まることになった。その夜、家の主人から「今夜は向こうの丘でお祭りをやっているから、見に行ってみたらどうだい」と促され、その祭りを見に行くことにした。ロウソクを片手に部屋の扉を開け、外に出たその瞬間、目の前に広がる光景に息をのんだ。月明かりも無い真っ暗闇の中、天井に覆いかぶさる満天の星空がそこにあった。それは、そのまま別の星へ旅立ってゆけそうな近さに迫っていた。言葉を失い、ただただ私はその場に立ち尽くした。

星に関しては、縁が無い、見ようとしなない、オレは駄目だねえ。何度も山のとっぺんでテントを張って寝たが、廻りの人たちが「すごいねえ」と言っている、ちらっと見るだけだった。

今、毎日のように我がホームページ（以後、HPで表現）の新装大改造に取り組んでいる。HPを始めてもう20年ぐらいになるのか、時間がどんどん過ぎ去り昔のものを見ながら改装するに当たり「ここはどうしたっけ？」と首をかしげるばかりの処が多い、しかもこの5年6年はHPの更新を怠っていた、今回は新たに作ろうと始めたがその膨大な量に唖然として筆ならぬ指が進まなかった。電電公社時代からの付き合いでNTTの回線・プロバイダーを使い続けているが、HPサービスを打ち切ると出ていた。「オレのHPはどうなる」とびっくりしあれこれ探してみるとHPを載せる場所はあちこちにたくさんある、という事で“FC2というところに決めた。まず驚いたことが幾つかある「おまえ、今頃何を言っている」と笑われるかもしれないが、初めてIT（インターネット）を使った当時、HPを作った当時から比べるとその進歩が凄い、時代に取り残されたじじいの心境だ。まず驚いたのが今まで10メガまでの容量でそれ以上は5メガ毎月に200円づつ追加料金が加算されたが、なんと今回は1ギガが無料なのだ、一挙に二けたの伸びであるしかも無料である。1K（キロ）バイトの1000倍が1M（メガ）その1000倍が1G（ギガ）その1000倍が1T（テラ）だそうだ。次に驚いたのが回線の速度だ。昔ITを始めた頃は電話料金が遠距離料金並みに設定され、金額は忘れてしまったが3分間で300円だったか、それからしばらくして“OO”だの“ISDN”などが表れた。電話回線が二つもらえるという事でひとつをFAXに使用していたがそれもすぐに、“光”回線が表れ、2回線時代も終わり、電話とFAXがまたまた同じ回線になった。どうもこのコロコロの変化、デジタル機器の日進月歩と同調し器具も装備も急激な変化の象徴のようなものだ。昔は100Kぐらいの写真はモニターに出そうと思ったらじわりじわりと上から写真が鮮明になり全部見るのに1分とかいう時間がかかった。HPの写真も20K、50Kがせいぜいで、重いものは載せられなかった。「岡村さん、あんな重い写真、困りますよ」と送った相手から怒られたものだ。今は1Mのページでもすぐに開けられる。次に以前から“PDF書類”を載せたいという希望があり方法がわからなかったが簡単に解決した。原稿用紙何枚かの長い文章をすいすい読むのに何とかきれいに載せる方法はとっていたがそれが簡単に解決した。画像や写真もそのPDFに載せようと思ったが、重くなりすぎてもと今回は諦めた。

そんなこんな毎日が続く中、検察審査会の画文を編集し直しながら読み返した。2003年となっている、ほぼ10年前の事だ、封書で、検察審査会：補助員に選ばれました、〇月〇日に大阪地方裁判所内に出頭してください、という書面だった。画廊がたくさん並んでいる老松町は周知の場所だが、「検察審査会とは何だろう」「半年間出向かなくてはいけない、えらい事だ」などと思いついでいると、「検察審査会事務局のものですが、〇日は出席してくれませぬ」と優しいおじさんの電話「はい」と答えたが、後々、仲良くなった長谷川さんだった。

検察審査会：日本では裁判をする、被疑者を裁判所に引き出すという権限は検察官が独占している、検察が「こいつは裁判所に引き出して白黒をつける」「こいつは裁判所に引き出しても悪の烙印を押すのは無理だ」「こいつは裁判所に引き出すほどの悪い奴ではない」という判断を独占しているということだそう。被疑者にしても被告人にしても、悪い事をした奴だとしても、あくまでも司法の世界では推定は無罪、警察に引っ張られる、裁判にかけられるというだけで大変な社会的制裁を受ける、こういう事を防ぐために、グレー色ならそっとしておくというものもある。その反対に検察官の一方的な判断で、裁判にかけないと決り、被害者は泣き寝入りという事もある。「それでも裁判をしてほしい、あいつを裁判所に引き出してほしい、あいつは悪い奴だ」と訴えるのが検察審査会だ。検察官が起訴をしないと決めた事案を「おかしい、起訴してくれ」という機関が検察審査会だ。

月に何回か、昼食時を除いて朝から夕刻まで一日中裁判所の重厚な建物の中で、警察や検察の調書、訴えている人の資料を読んで「こいつのここがおかしい」「訴えているこの人の方がおかしいんじゃないのか」と話し合った。検察官が起訴しないと決めた事件、それこそ机に積み上げたら顔が隠れるぐらいの高さの膨大な資料、これを読みましようと言われ、斜め読み読んでいった、素人ながら、「こいつは悪い奴だ」「こいつの方が悪いのでは」「いやいや悪いのは規則だ体制だ」と話し合い合点のいかない事も幾つかあった。

検察審査会の事を書きながら思い出したのが“小沢一郎”という政治家、過って彼も検察審査会で起訴相当とされ、検察が起訴し、何年間か裁判に引き出され、無罪を勝ち得た。あれは何だったのか、最近あの政治家はマスコミにあまり登場しないようだがどうしたのだろう、個人的には好きではない政治家だけれど、なんて小生意気に意見をいうオレもマスコミの宣伝に踊らされ、彼の人となりや聞かされ見せられた多くの中の一人かも知れない、好きだ嫌いだという事さえはばかられて恥ずかしい限りだ。だけれどあの事件は何だったのか調べてみた。検察審査会での会議は訴えられた案件の調書を読み話し合い意見が出そうとその後全員で評決をする。その結果によって“起訴相当”“不起訴不当”“不起訴相当”と3つの答えが出る。検察審査会上がってくる案件は全て、検察官が“不起訴”と決めたもの「これは裁判に引き出さない」と決めたものだ。その不起訴と決まった案件「これを起訴してください、考え直してください、裁判してください、不起訴ではダメです」と何者かが裁判所に訴え検察審査会にその案件が上がってくる。検察審査会では、素人の人たちが、検察が起訴しなかった膨大な資料を読み話し合い「起訴すべきだ」「起訴をした方がいい」「起訴しない」と答えを出す。半年間に「こんな下らない案件を訴えてくれるな」「これは筋違いじゃないのか」というような、訴えマニヤ、半分いたずら、半分嫌がらせ、自分勝手、ヒステリックというように「こんなもの即却下」というものも多かった。学生が恩師の先生を訴えているもの「馬鹿にされ、罵倒された」「学校に居られなくなったのはあの先生のため」先生は「普通の生徒として接していた」「この訴えが学校に知れ職を解かれた、今は私自身が困っている」こういうアカハラ、セクハラの話、お互いの罵り合いの応酬で話は藪の中だというのが普通だが、此処の処、こういう話し合いの調書を冷静に読んでいるうちに、「こらあ、訴えている奴の方が上手と違うのか」「訴えられた方が、地位や名誉を奪われ社会的制裁を受けている」「目上の人間の社会的制裁が目的みたいだ」なんてことに意見が収まっていく。勿論本当のハラスメントで訴えても聞いてもらえない話も多いと思う。人の善悪を見分けるのは素人も玄人も無い、むしろ「がんばれ素人」と言いたい。

木村朗（あきら）＜権力の暴走とメディアの加担-小沢問題の意味を問う＞

これを見つけて、読んでみた、本当もっとじっくり読まないといけませんが、「あれれ？」と思う部分が出てきた、この「あれれ？」は、以前、集団自衛権の事を調べていた時にも感じた「あれれ？」なので紹介。アメリカの存在、集団的自衛権の時はアメリカの軍産政複合体の話が出てきて、アメリカの話に乗らなければいけないのなら反対だと決めた。今回はアメリカの意に沿わない政治家潰しの話、この潰しに日本の政治家、司法官、大新聞（マスメディア）TV、等が毎日のように潰しにかかっていく、という恐ろしい話だ。アメリカが日本の国体を操作する、アメリカがやりにくい、扱いにくい人を淘汰する、そんなことがあるのかなと大きな疑問がオレに湧き上がった。

2012年：小沢一郎衆議院議員に対する裁判で東京高等裁判所は改めて無罪判決を言い渡した。裁判は検察審査会での2度の「起訴相当」決議に基づく強制起訴によって始まった。小沢問題を冤罪と報道被害の観点から小沢問題を考察した場合に何が見えてきたかといえば、検察とマスコミが一体化した情報操作による小沢氏の狙い撃ちと民主党叩きの世論誘導が米国の圧力をうける形で行われた可能性、すなわち検察権力のリーク情報を無批判的にマスコミが裏づけを取らないまま小沢氏を犯罪人扱いするような過剰な印象操作・偏向報道を一方向的に垂れ流し、その結果、検察の正義を疑わない一般国民がそれを鵜呑みにして小沢批判を強めて民主党離れを加速させるというある意味で分かりやすい構図である。

いま本当に責任を問われなければならないのは、（国家権力を悪用した政治家・官僚・検察官・裁判官だけでなく）他ならぬそうした主張・姿勢をしている人々ではないかと考えるからです。

先生の話、どれが本当で、何が間違っているのかわからない。“わるい奴”の烙印を押され、徹底的に叩かれた人たちがたくさん居た。あれは本当だったのか、だれかが「わるい奴」を作り上げる操作をしたのか、本当に「わるい奴」だったのか。もう少し調べてみなければわからない、もう少し勉強します。

こんな方々の名前が出ていた。ホリエモン、三井環、佐藤栄佐久、鈴木宗男、佐藤優

台高縦走（山を端から端まで歩く事）の台高とは、大台ヶ原（おおだいがわら）と高見山を結ぶ山脈の名前だ。柿本人麻呂：万葉集「東（ひんがし）の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ」大宇陀からこの台高山脈にかかる陽炎を見て読んだ歌だそうだ。台高という言葉は最近造られたものらしい。

家を出て2時間、県境の高見トンネルを抜けすぐに右へ、見覚えのある場所だ、4.5回は来た、此処で休憩もしたところのある小さなパーキングを見ながらぐるりと右へ旋回、しばらく行ってT字路を左、またしばらく行って二股を左へ、いよいよ舗装がされていない地道の林道、大雨で崩れ路肩が怪しい処、切り立った上から大きな岩が落ちている処、最近の大雨、何年か前の台風の爪痕、紀伊半島の山の中は大崩がいっぱいだ。しばらく行くと不動明王と書かれた旗がはためく、そこに1台止まっている、その横に我々も駐車。二日前に久子さんから「台高に行くけど、行けますか」「行きます」と返事をして、今朝は6:30に家まで来てくれた。9時に林道歩きを開始、1時間ほどで「ここから渡渉して、向こう側を少し川沿い歩いて登り」「え、此処を渡渉」とずるずる下へ、水は綺麗でそのまま飲めるがまだまだ汗も出ていない、渴きを感じていない、濡れた石を3個4個と踏んで向こう側へ、じっとり湿った斜面をトラバース「何処まで続くかな・・・」不安なオレ「ここから上へ」今度は急斜面をどんどん上へ、道なきところを1時間半も歩いて尾根に出た。1000メートルぐらいの尾根道には植林の檜、自然林の広葉樹が右に左に現れる、今までの山はほとんどが杉の植林だった、この辺りはほとんどが檜「檜は乾いてもいいみたい、杉は湿った方がいいみたい」オレが毎年雪かきに行く富山の家主の久子さん、木にも花にも山にも詳しい。「ここら辺りは熊が少ない、熊棚をあまり見ない」熊の事までご存知だ。ひよろりと伸びたい盛りの木、どっしり堂々の木、腹がえぐれて人ひとり入りそうだが青々した大木、枯れて茸がいっぱい生えた木、途中から折れてもう倒れるのを待つだけの木、様々な緑が盛んに匂っている。所々に木の無い処、展望の開けた処もまた嬉しい、大嶺の山並みも見える、何層にも連なって山脈が地平線に消えている、奈良・和歌山は山深い処だ。9月に入って空が雲がきれいだ、くっきり青空の中に白い雲が色々な模様、今日も空がきれいだ、今日の空はまだら模様だ。

この辺りは鹿が多い、この辺りだけではなく日本全国鹿が多いそうだ、尾根にも草は少ない、笹も少ない、地面が見える、この地面が見える現象が土砂崩れに関係あるのかどうかは聞いた事が無いが、直接土なら雨もすぐに下に落ちるかも知れない、「藪漕ぎ」という言葉がある、草や笹や藪を掻き分けて歩く時に言う、藪漕ぎはなかなか歩きにくい前方も足元も見えないが、昔は登山道以外の処はこういう状態が多かったような気がする。鹿が草や笹や藪を根こそぎ食ってしまうからこのようになっている。鹿や猪の天敵“オオカミ”を復活させようという先生の声が懐かしい。赤ぞれ山を過ぎ、国見山の手前、少し開けた処、トンボがブンブン飛ぶ、丁度良い気候、暑くも寒くも無い、しかも天気がいい、向こうも見える、そこで昼食、いつもの弁当、旨い、食べ過ぎた、腹がいっぱいだ、山頂までピストン。9月の初旬なのに紅葉した葉「つたうるし」だそうで初めて聞く名前だ、漆の木的一种で触れるとカブレるそうで子供時代にえらい目に会ったそうだ。ウルシの木と言われてもどれだかわからない、オレも子供時代にカブレた事があった、どの木にいつ触れたのかわからなかったが「これはウルシだ」と大人が言ったように思う。大きな木に巻き付いて上の方で黄色い葉、時には赤い葉が見え隠れ、つたウルシの紅葉は赤がいい、黄色より赤色の方が気に入った、黄色い葉が10枚ぐらい、赤い葉の2.3枚が丁度いいなんて「勝手に言うな」とウルシ君に言われそう。2時頃になって空が黒くなってきた、にわか雨、雷雨の予報が出ていたが降ってくれるなと願いつつとどんと歩いた。木梶山を過ぎ「こっちの尾根に行くとは帰れるはず」とぼちぼち下る。「ここを下ると多分林道があるはず」「え、ここ」と檜の植林の間、けっこうきつい斜度「大丈夫かな」と恐がりのオレは心配したが、雪の斜面に近い感触、積もった落ち葉がクッションになってかかとで歩くと滑らない、100メートルと地図ど通りに林道に出た、やっと帰れた、面白かった、いい山だった、林道を歩き始めると目の前に土砂崩れ、アレレと慎重に上へ、木をくぐり、枝を跨ぎ無事通過、車の処まで戻った。道なき道を歩く山、なかなか面白いスリル満点、でもひとりでは来れないなあと久子さんに感謝。その夜寝ながら「豪雨、雷、窓を閉めなければ」と思いつつ、酒を飲み、寝不足、疲れた身体はそのまま眠りこけてしまった。翌日皆さんが「凄い雨だった」「凄い雷だった」という会話を聞きながら、山の中で雷雨に会わなくてよかったと胸なでおろした。画像はつたうるし。

昔の山の話の整理中に「こんなところに行ったのか」という山の名を見つけ短い文を読みながら当時の少しづつ甦り思い出している、その話を紹介。山は南アルプス<後三山：広河内岳・大籠岳・白河内岳・黒河内岳・白剝山>あまり聞かない山の名前。1998年となっているので16年前、52歳とまだまだ元気盛りの頃、同道というより連れて行ってもらったのはいつもの澤山さん。当時の文では山の師匠と書いているが今は仲良くさん付けで呼ぶ。若い仲間「山の事は何でもよく知ってますね」と冷やかされていたが、半世紀前の大学山岳部出身、本人も学生山岳部時代に岩ぶら下がり遭難事故で新聞沙汰になったほどの猛者、確かに山の事はよく知っている、人の知らない山、人っ子一人いない山、を連れて行ってもらった。何年か前に、急角度の雪の斜面「ここはザイルを巻いてくれないと降りられない」とオレはごね、後ろから引っ張られて雪渓を降りた、現金なもので呆れた元気さでザイルで確保されていると思ったらスイスイ降りれた、懐かしい思い出、これは毛勝山の事。

東海パルプ保有林（社のHP）：井川社有林は、民間が日本国内に所有する1団地としては最も広く、東京のJR山手線で囲まれる面積の4~5倍に相当。我が国第4位の高峰である間ノ岳（あいのだけ3,189m）をはじめ、標高3,000メートルを越す山を10座も擁する。（北岳や甲斐駒などは入っていないが、南アルプスの主要山岳はほとんど入っている・・・）江戸時代、駿府の防御としての直轄地（天領）であり、その管理を、酒井家が任じられていた。その後、明治28年に東海製紙の創業者である大倉喜八郎が時の酒井家当主酒井忠惇から購入。豊富な森林資源・水資源が判明。木材生産や製材、発電事業にまで夢を膨らませ、井川社有林の木材資源と大井川での水力発電を組み合わせた事業が東海製紙の起源となった。

この山行では5日間も山の中に入っている、断片的にしか思い出せない、そんなところに行ったかなと全く記憶から飛んでしまっている部分もあるが、印象に残っているのは川沿いに点在している飯場の廃屋、その中の一つで2泊もしたようだけれど、つい最近まで屈強な男ども、世話焼きのおばさんが寝泊まりしていたような匂いが残っていた。この雰囲気は1980年ぐらいまでは10軒ぐらい残っている飯場に、人夫のおっさんが寝泊まりをして木を伐り出したり植えたり、道路を補修して、河川を管理して、飯時にはおばさんたちが煮込みや焼き魚を造っている食堂に集まって食事、夜にはまだまだビンのビールに酒に焼酎と怪気炎を上げていたのだらうと想像するだけで活気が目に浮かぶ。飯場がプレハブになる前は木造の小屋、馬車が丸太を積んで運んでいた、それこそ山仕事、頑丈なおっさんたちが山から木を伐り、それらを下まで降ろし、轎なり馬車に乗せて運んだんだらうね。製紙業に使う木は今ではほとんど外国産？リサイクル産業の雄、世界で植林による環境保全、光合成による地球環境保全と日本の製紙業界のネットは謳っている。まだ飯場が活躍していた頃は紙の生産も少なく伐採も少なく環境破壊も進んでなかったが、製紙工場の汚水垂れ流しはよく聞いた話だった。飯場の懐かしい匂い、おっさんたちの鋸やツルハシ、最後の頃には重機も入っていたのかもしれないが、何年も経った豪雨積雪地帯なので、面影は残っていない。

最終日は二軒小屋を、予約してある。3時過ぎにつけばいい。たらふく夕飯を食って散策。澤山さんは18歳の時35年程前に来たそうだが今は山小屋というより山のホテル。値段も13000円プラス税。山から帰って泊まるにはもったいない。横に登山者のための素泊まり小屋がある。4000円だそう。ダムからここまでのバス代が、無料なのは、ありがたい。

今ここに載っている二軒小屋ロッジを検索したら、快適なホテル風ロッジになっている。昔からこうだった？こんな恰好のいいロッジの記憶はないが、値段は当時のママで13000円プラス税。榎島ロッジも泊まった事があるが、これまたきれいになっている、当時は寄宿舎の寮のような建物だった記憶なんだが・・・ここは2食付で9,000円也。山に登らなくてもここに泊まって散策もいいかも。5年10年前から山の仲間の先輩が「もう山はいいよ、温泉だ、旅館だ、ロッジだ」というのを聞きながら笑っていたが、今になるとオレもこれはよしかな。

赤坂山は以前積雪時に登ったことがある、コーコさんのグループの山例会に潜り込ませてもらった。茨木駅から電車に乗ったが何処で降りて何を利用して登山口まで行ったのか覚えていないが、なだらかな雪の斜面を歩いたのだけは鮮明に頭の中に在る。今回はいつもの相・垣・前と4人での道中。7時に相車で茨木を出発した。ナビを入れた、調べた通りに“マキノ高原温泉さらさ”と入れると滋賀県の目的地が出、高速料金1400円ぐらいと2時間30分かかるとなった。昨日パソコンで調べた時には2時間と出ていた、多分2時間ぐらいだろうと訝しく思ったが、道路情報は日時の渋滞状況によって変わるので仕方がないかとどンドン走った。京都東ICから湖西道路、いつも曲がる堅田を超えそのまま敦賀方面へ、ほとんど湖北に近づく頃に道路標識にマキノが出てくる、マキノの有名スポット、メタセコイヤの並木道、これはいつ見ても綺麗だ、素晴らしいと横に眺めて温泉手前の駐車場に到着、無料だ。赤坂山はこの2年ぐらい度々来ている高島トレールの北の方にある一山で花の100名山で有名だとか。高島トレールは琵琶湖と日本海の間につながる山々、滋賀県と福井県の県境その尾根道が境界線だ、琵琶湖と日本海に流れる雨水の川の分水嶺でもあるらしい、赤坂山は湖北に近い処に在る。登山口までの芝生の高原はグラウンドゴルフ場やキャンプ場に使われているが雪が積もるとスキーの初心者コースになるのかもしれない。登山口が書いてないので山姿の人に聞くと親切に教えてくれた。階段、ステップときれいに整備された山道で、初心者の人でも簡単に登れそうだ、30分ピッチで登った、コースタイムが2時間と出ていた、2時間半はかかるだろうと踏んでいたが、2時間で頂上に着いた、これは感激、オレの感覚が鈍っているのか皆さんがいう「この山は穏やかで歩きやすい」「先日の山は陰し過ぎて歩きづらい」というような感覚がわからなくなっている、自分勝手に「簡単だ、綺麗だ、美しい」と謳っているが、「何処が簡単?」「何がきれい?」「なぜこれが美しい?」というようなズレがある、反省しなければ。

赤坂山の上の方、尾根道は木が無く草原で展望が開け琵琶湖がすぐそこに見える湖北が近い、日本海が幽かに見える、麓の田んぼが稲を刈り取ったばかりの黄金色、ススキがなびいているが、普通は白い褐色系の色なのに少し紫色がかかっている不思議なススキが山一面に生えている、風は涼しく、景色は綺麗、適度な疲労感、皆さん感激。11時過ぎには弁当を食った、コンロで湯を沸かしコーヒーを、皆さん持参のお菓子を、旨い限り。予定ではピストンのつもりだったが「寒風峠(かんぷう)を廻っても1時間余計にかかるだけなら」という事で足を延ばすことにした。「よし行こう」皆さんなかなかいう事が頼もしい、心地よい尾根道をルンルン歩く、少々の上り下りぐらいなんのその、心地いい風、マキノの麓の田園風景、少し先には琵琶湖が見える、快適だ。ここは高島トレールの一部、遠くに日本海、敦賀が見える福井県と滋賀県の県境だ。まだかまだかと3回4回上り下りの末寒風峠と書かれた標識を発見、左はマキノ高原となっている。1000メートル足らずの尾根道だが木が無い、よほど冬の風がきついのか、少し下に行くとブナがある、広葉樹林がある、もっと下は針葉樹の植林がなされている。

これはブナの木だ、此処のブナ林は大木・巨木が無い、みんな若々しく元気だ、見渡せば直径30センチ未満のたぐさんのブナがあちこちに立っている。ブナは用材に適さないという理由でどンドン伐採されたそうだが、保水力が強く森の豊かさのバロメーターだとか。大木になると根から毒素をだし周りの木をやっつける、自分のテリトリーを独占する、そんな木があるとは知らなかった。皆が競い合って上へ横へ勢力を伸ばしボス自身が巨大になり自分の安泰を勝ち取るとばかり思っていたが、毒を出して廻りを牽制するとはすごいというか、よくもそんな風に進化したものだとか感心。たまたま翌日も神戸市立森林植物園に行くことになった。ここで感心した木が世界で一番大きな木、セコイア杉だ。実物の輪切りが陳列されていた、樹齢2000年だという、近寄ってみると年輪の幅が狭い、2ミリぐらいしかない、触ってみると堅そうな木だ、2000年3000年も生きる木は1年にミリ単位で太くなる、硬くしっかり大きくなるという事なのか、それこそ大型バスの長さぐらいの直径になるそうだ。

赤坂山は、穏やか、景色がいい、歩きやすい、素晴らしい、楽しかった、とたぐさんの賛辞を皆さんから得た、また来ましょう。6時に茨木に着き、居酒屋で乾杯、楽しい限り。

「峰床山に登ろう、今夜は葛川（かつらがわ）の河川敷で寝よう」午後3時に大阪を出発し夕方5時に到着した。福・衣・トモ・岡村の4人。「え、安曇川じゃないの、葛川なの」と驚かれたので調べた。＜葛川は安曇川上流部分の名前、同じ川であり、淀川水系である＞ここは公営のキャンプ場で一人300円と安い、トイレとゴミ捨て場がある、我々のように明日は山に、川に、旅の途中の人が、車の中で寝る、テントを張って寝る、食事の装備や道具を持っている人が集まってくる、そういう便利な場所だが、普通のキャンプ場やオートキャンプ場のような設備はない、家族連れでTVが見たい、食器を洗いたいというような設備はない、しばらく滞在して遊ぼうというような家族連れには不向きかもしれない。4人の歳を足せば250歳には届かないものの皆さん童心に帰り「食事の用意をしよう」

「テントを張ろう」と車から荷を下ろし、あっと言う間に食卓が、椅子が、テントが出来上がった。テントの話ですが、山に持っていくテントはリュックに入れ担いで運ばなければならない、それに山の上で強風、豪雨、豪雪に遭っても潰れないと諸条件が付き、狭い、低い、高価、となる。強風対策はテントを石や木に結び付ける、何か所かペグを打つ、テントサイトに防風壁を石や雪で作らなければならない。雨が浸水しないようにテントの周りに溝を掘らなければならない、雪が積もると押し潰されるので何度も中から外から雪を払い除けなければならない、というような経験も何度かあったが、今日は穏やかな日和、石ころを四隅に置いてだけで完成、シート、寝袋、荷物を入れたら終わり。「さ、飲もう、食べよう」とまずはビールで乾杯、4人の顔は大いにほころんでいる。ビール、日本酒、焼酎、ワインと飲みもの群、具だくさんのマリネ、おでん、鶏とネギの簡単鍋と食べ物群、旨い、星がきれい、ダウンを着るほどには寒くない、9時頃には眠りについた。

「足が痛いので待っている」と福さん、3人で葛川小学校へ車を走らせ、空き地に駐車し林道を30分。この林道が荒れている、相当箇所が崖崩れ、土砂崩れ、路肩崩れで工事車両以外は入れない、よくもこんな壊滅的被害に遭ったものだ、駐車した辺りの人家に被害が無くてよかった、葛川流域その支流流域は高さは低いが山が急峻で昔からたくさんの被害が出ていたようだ。

いよいよ登山口という処より何回かの渡渉、幅員5.6メートルの小さい川だけれど、石を踏み、飛び越え、何とか靴をぬらさずに済んだが、滑る石、冷たい水、澤や谷はどうも苦手だ、川から少し上がった斜面の道、ずりりと滑り落ちそうな処、下を見るとヒヤリとする処、こういうのも足がすくんで苦手だ。この谷筋も台風の影響で何か所も崩れていた。さあこれからの中村乗越まで登り、土は乾いて歩きやすい「登りは任せてください、衰えたとはいえ登りまずぞ」というがこの山の登りは1時間少しで終わってしまう、大きい山なら2時間3時間登っても上には着かない。穏やかな尾根道、乗越に着いた、軽く食事をして湿原に降りた、湿原と言っても、透明な掬って飲める水が流れる一っ飛びの川、草が生え木が生え少し湿った平な処、大きな木がある、精霊が宿っていそうな木を一本見つけた、いい感じの処だ、素晴らしい。目的の峰床山は琴線に触れる処は無かったがぐるりと一周してまた湿原に戻り、3時に仲間の待っているキャンプ場に帰り着いた。

木の精霊という事で、この山も上の方は自然林、街が木を大事に管理、鹿よけ網が何か所も作ってあった、大木がたくさん在った。ブナ、ミズナラ、スギ、ヒノキ、クリ、もっとたくさんの種類があるのだろうけれども、それぐらいしか名前は出て来ない、本当にその名前が正しいのかも怪しいが、「花や木の名前は知りません」という事でご容赦を。先日車で何処を走っていたのか忘れてしまったが、道路の真ん中に小さい家一軒ぐらいの大きさの石が鎮座していた、石には締縄が巻かれていた、道路は石を挟んで左右に巻いている。おそらくその石は昔から在った、道路になるまでは細い道が石を巻いていた、通る人たちは石に向かって「やあ」と言って挨拶をした、そのうち拝むようになった、車が増え道路を造らないといけなくなったが「お石さま」は其処にそのまま居て頂いて、道路を曲げた、「え、こんなところに石が」と始めてみた人は思うけれど、ほとんどの人が「石が祀ってある」「神様の石だ」と思う「邪魔だ」「潰せ、転がせ」とはだれも言わない。オレも車で走りながら「こんなところにお石様が居る、こんちは」と思って通った、見つけた大木、此処には精霊が宿っているかも「こんちわ」「登らせてもらってるよ」と挨拶をした。何でもかんでも気に入ったものは“神さま”儀式儀典なんていない、難しい教義、おどろしい規則はいらない、あっけらかんと“神さま”こんにちわと付き合いたいものだ。木の精霊さま「またね・・・」